

孔子こうしってどんな人？

『論語』は、孔子の言葉を主として、門弟や他の人々との問答などを集めた書です。中国では、漢代の頃にすでに儒学の経典とされました。日本にも応神天皇の時に伝えられ、古くから必読書として読まれ続けています。今日でも孔子の言葉の影響力は絶大なものだといえるでしょう。

では、孔子はどのような人物だったのでしょうか。数々の名言を残していることから、さぞかし万事思い通りの人生を歩んだ人物をイメージしていませんか。

孔子は、紀元前五五二年、魯ろの国（今の山東省）で生まれました。幼くして父を亡くし、母親に育てられました。早くも苦難の道の始まりです。「十有五にして学に志す」とあるのは、貧困であるがゆえに、若くして学問に励んだためです。十九歳で結婚し、「鯉」という子を授かりますが、一貫して学問に対する探求心は強く、どこへでも行つて教えを乞うています。その名声もようやく広まり、三十歳を過ぎると弟子たちが集まり始めます。孔子は政界で理想の世を行うことを望んでいましたが、この面では思うようにはいかず、もっぱら教育者としての地位を築いていたのです。

政界での理想を遂げたい孔子は、五十代前半でやつと魯の国の重要職に就き、それなりの成果を上げますが、結局ここでも当時の国政を立て直すことはできませんでした。そこで、孔子は理想の政治を実現する国を求め、弟子たちを従え、諸国を遊説することにします。五十六歳から六十九歳の十四年間にわたった旅ですが、結局、孔子を受け入れてくれる国はどこにもなく、政治への希望を空しくただけでした。以後、教育に専念しますが、息子の鯉、最愛の弟子であった顔回・子路を相次いで失い、悲嘆の中で、七十四歳の生涯を終えました。

このように、政治家としての孔子は決して順風満帆とは行かなかったことがわかります。裏を返せば、現実社会の辛酸を味わったからこそ、人間に対してより深く観察し、人間関係、社会がいかにあるべきかを追究することができたといえるでしょう。

ここでもう少し孔子の人間像を掘り下げてみてみましょう。孔子はどのような容貌だったのでしょうか。身長は「九尺六寸」、なんと約二二〇センチメートルもあり、周りから「長

大」(長人)と呼ばれていました。また、頭の上部が発達し頭頂が凹んでいたといわれています。このような先生を想像してみてください。イメージしていた孔子とかなり異なりませんか。

そのような孔子が弟子を教育したのですが、その功績は目を見張るものがあります。弟子は三千人いたといわれています。では、孔子はどのように弟子を指導していたのでしょうか。

ある時、弟子の中で最年長の子路が「よいことを聞いたらすぐそれを行ってもよいでしょうか。」と尋ねたところ、孔子は「父兄もおられることだ。どうして聞いたことをすぐさま行つてよかろうか。」と即座に行うことを抑制します。一方、弟子の冉有^{ぜんゆう}が「よいことを聞いたらずすぐそれを行ってもよいでしょうか。」と尋ねると、孔子は「聞いたらずすぐさまそれを行いなさい。」と即座に行うことを勧めます。両者への孔子の対応を見ていた年少の弟子は不審に思い、どうして二人に対する対応が違うのか孔子に尋ねると、孔子は「冉有は消極的なので励まし、子路は出しゃばりなので牽制したのだよ。」と答えました。これらの対応を見てわかるように、孔子は弟子一人一人の特性を見抜き、それぞれに応じて指導

を変えています。こうした教育は現在にも通じますね。

『論語』の中に出てくる孔子の言葉は、言いにくいことを端的に短い言葉で言い当て、人の心を魅了します。そのため、孔子が規則や法則を言っているように捉えてしまう人が少なくありません。しかし、そのようなことはありません。弟子に対して、褒めることもあれば怒ることもあり、激励することもあれば心配することもあります。孔子の弟子を見つめる眼は慈愛に満ちあふれているのです。

孔子は、自身は不遇を味わいながらも、絶えず学問への探究を怠らず、慈愛をもって弟子の育成に励んだのです。